

2017年度1次隊、マラウイ共和国のムジンバ県北部カウエチェヘルスセンターにて栄養士として活動を行っております、中平有です。自身の活動についてほんの一部だけ、この場をお借りし紹介させていただきます。

何もない、それがマラウイ =====

マラウイ共和国(以下、マラウイ)という国、皆様におかれてはピンとこない国であるのかもしれない。マラウイはアフリカ大陸の南部に位置する国で、国土は日本の3分の1程度、人口は2017年時点で1,862万人を有しています(*1)。国民の平均所得は320米ドル、毎日1米ドル以下で生活を営んでおり(*2)、世界銀行が定めた国際貧困ラインの1.9米ドル/日を大きく下回っています。

隣国、西に位置するザンビアには世界三大瀑布の一つとされるビクトリアフォールズが、北に隣接するタンザニアにはアフリカ大陸最高峰のキリマンジャロが有名で、一度は耳にされたことのある方も多いと思います。マラウイと言えば... 何があるんですか、と聞かれて返答に困ることが多いのがマラウイ隊員あるあるの一つ。アフリカ大陸で3番目に大きなマラウイ湖がありますが、ご存知でしょうか。

マラウイは多くの民族が混在する多民族国家で、配属先のあるムジンバ県北部には、およそ150万人いると言われるトゥンブカ族が主に暮らしています。活動には彼らの母語であるトゥンブカ語を使用します。マラウイに、特に北部に帰って来ない限りは二度と使わないと断言できるこの言語が、今は業務に支障がない程度のレベルにまで理解できるようになっています。

任地での活動 =====

さて、自身の活動はと言えば、主に予防接種や体重測定を実施する5歳未満児検診にて低栄養児をいち早く見つけ、即座に栄養指導を行ったり、該当児が送られる栄養改善プログラムへの参加を促したり、栄養補助食品を配布するのが日常業務となっています。同時に栄養改善プログラムにかかる物品の在庫管理やモニタリングも今は殆ど一任しています。実際は、放っておくと誰も実施しないからなのですが...

既に述べた通り、マラウイの地域住民の多くは収入がほとんどありません。肉は勿論のこと、鶏卵やマラウイ湖で取れた魚でさえも贅沢品として扱われており、タンパク質に富んだ食品を手に入れることが容易ではありません。

私は赴任当初より一貫して、マラウイで大豆の栽培が盛んであることに着目し、日本人には馴染みの深い大豆加工品の啓発を行なっています。保守的で新しい食材には見向きもしないマラウイの現地住民ですが、きな粉の調理法を紹介した際には、名前の響きが気に入ったらしく、“KINAKO、KINAKO”と皆が面白がりながら声に出している様子を耳にします。名前のインパクトが先行してしまっているのは理想ではないものの、名前からでも少しずつ定着してくれることを期待し、啓発を続けています。

マラウイで感じた、本当の課題 =====

最貧国と言われるマラウイも、20年前には40歳前半であった平均寿命が既に60歳を超える(*9)等、現地で生活し、住民の生活を見る限りではさほど苦しい生活を強いられているようには見えません。しかし、赴任後1年6ヶ月を経過して感じる最も大きな懸念は、この国が、国民が、他国からの援助に依存し、常態化している、ということです。

国の財政は他国の援助が無ければ機能せず、ヘルスセンターに届けられる医薬の多くが支援によって賄われています。最も恐ろしいことは、比較的裕福と思われる子ども、物心ついた小さな子どもでさえも、誰の背中を見て学んだのか、“Give me”と口にするのです。結果として、物をもらうことに慣れきってしまい、生産性が失われてしまうことが心配ではありません。

しかし、もし仮に、各国がマラウイから撤退してしまえば、飢えは深刻化し、薬が届かず、多くの命が消えてゆくこととなります。このジレンマに直面している隊員も多いはずで

自分はなぜここにいるのか、その理由 =====

私個人の考えとして、我々日本人も、現在生活を共にしているマラウイの地域の人々も、向かうべき方向は同じだと確信しています。我が国の地域医療において、地域包括ケアの充実を図るのと同じく、マラウイで関わりを持つ全ての住民とともに、「予防できることは自分で実施する」「一人でできないことは地域で助け合いながら行う」「それでも大変なこ

とは行政と一緒に解決を図る」という認識を持つことが大切であると感じます。自助・共助・公助を養っていくことが、包括的に地域医療の底上げを図るだけでなく、支援に極力頼らない体制を築き上げていくことにつながっていくと信じ、私は日々の活動に励んでいます。

参考資料

*1,*2,*3 : THE WORLD BANK (<https://data.worldbank.org/country/malawi>)

低栄養児の上腕周囲測定



5歳未満児検診での健康講話

